することになったのである。

バム鉄道敷設

岡山県　大水　操

私は鶴になりたい。

零下三十度の寒空を南に向かって飛んでいるあの鶴の一団は、毎晩夢に見る故国へ飛んで行くのだろう。ああ帰りたい。郷里、両親、兄弟を思い、涙が滂沱としてほおをぬらす。ああ帰国したい、帰りたい。

時は昭和二十三年一月、反動分子として私は第一地区サラワッカ第二一八懲罰分所より第四地区バム鉄道建設地ウルガル四一〇分所に転出。五月まで四一〇分所分遣隊ウルガル貨物倉庫に作業員として勤務。責任者東京出身宮原軍曹、北九州出身「イツキ」軍曹で、約三十人くらいと思う。

一般ソ連市民、抑留日本人の糧秣貨車おろし、積み込み作業をした。荷おろしが主であったが、何分冬季で毎日零下三十度、四十度で、凍りつく寒さの中でぼろぼろのロシア服、粗末な手袋。小麦は三十トン車ばら積み、扉の下面に十センチくらいの正方形の穴、これより麻袋を受け六十キロほど入れ、板坂の二階製粉所へ担ぎ上げる。やせ細った体でふらふらで、もうここで死か。死にたくない、無念だ、涙がポタリ。情ない、どうしてこんな目に遭うのか。ああ一目両親に会いたい。しかし、もう会えないかもしれない。

昭和十六年二月、現役入隊してより八年目、自分の年を数えてみると二十八歳。ここウルガルで最後か。覚悟しなければならないが、残念無念だ。ふと上空を見上げると、寒空にザーっと物すごい羽音、鶴の大群が南を指して飛んで行く。ああ鶴になりたい。そして一路南の故国に飛んで帰りたい思いで、涙が流れる。振り返るとみんな泣いていた。思いはみな一緒だ。

肉おろしは、目をむいた牛の頭だけ。角を持って背負い地下倉庫へ。少し暖かくなって牛の臓腑おろしには閉口。上衣のロシア服は脂でべたべたで、大変臭い。また関東軍より押収したみそだるをおろすと、「これ

は何だ」と監督は言う。我々はたるをあけて「日本人の大便だ」と言うと、つばをかけ「捨てろ」。タコのたる詰め、「これは海の虫だ」「これも捨てろ」と言うので、詰め所に持ち帰り、夕食に岩塩でたいてご馳走になる。

小麦の製粉は、大きな直径一メートル五十センチくらいの石うす。下うすは固定、上うすだけが固定心棒で回る。発動機は神戸製鉄製の四十馬力。昼夜二交代制で、夜間は零下四十度、二階二人、小麦をうすに入れ、下一人、小皮まじりの粉の袋詰め。腹がすくと、この黒い粉を水で練って丸いせんべいにして、煙突の上で焼いて食べる。この皮まじりの粉だから黒パンができるのだとソ連人が教えてくれる。このような作業をウルガルで昭和二十三年五月まで行いました。

バム鉄道道床敷設工事

昭和二十三年五月より四一〇分所第二中隊長を命ぜられ、ウルガル東方四キロ地点の山をダイナマイトで掘り起こし、土砂を主に西方路線に貨車で運び、道床上げをした。

山は第二中隊約五百人。山に立て穴掘り二人一組。五メートルの間隔で深さ六、七メートル掘り下げ、底部へ横穴を一メートル掘り、ダイナマイトを麻袋に二分の一入れ、導爆索を差し込み、十メートル幅で二線掘り爆破。引込線で貨車に積み発送ですが、工期期限内に計画どおり進展しません。抑留者は疲労こんぱいで、作業監督中尉が、中隊長の指導が悪いためだと激怒し、中隊長を穴に埋め爆破すると命令。私は、中隊員は連日の強行作業で体はやせ細りふらふらであり、無理をするな、生き長らえて何が何でも故国に帰りつこうと激励して回った。そして作業のおくれは私の責任だから穴に生き埋めにして爆破してください、覚悟していますと、監督中尉に申し出ました。これもおどしでした。

強行なノルマ、穴掘り作業で疲れ果てて帰り、夕食を済ませ就寝中またまた貨車の土砂おろしで作業出動。外は真っ暗、吹雪模様。三十トン無蓋車にスコップを持って二人ずつ乗車して、土砂を両側におろす。零下三十度、体も凍りつく。昼間の作業で疲れている

体、もう死んでもよい、いや、死にたくない。故国にたどり着くまではと、元気を取り戻しておろす。

もう夜中の十二時、貨車おろしが済むと下の線路上の掃除。土砂があると脱線するから、私が各車を見回りして、終了引き揚げの指示をした折、収容所内日本人大隊副官某軍曹来たり、線路掃除やり直しと指示する。私は終了であると宣言、副官と大げんか。果ては暗夜吹雪の線路上、中隊員の見ている前で、貴様日本人か、同胞を一人でも多く故国の土を踏ますのが我々の責任だぞ、貴様はこの場でぶち殺してやると、大格闘。ソ連軍警戒兵や作業監督らが駆けより仲裁に入り、一応終了。

この件で我が中隊兵は非常に私を信頼してくださり、私も大変うれしかった。

日独共同の運動会

石川県　河原三雄

敗戦間際の根こそぎ動員で、補充兵として大連の自宅から朝鮮軍に応召した私は、戦後も北鮮に抑留されて、ソ連船の荷役作業などに明け暮れたが、昭和二十二年七月、羅南港からハバロフスク経由のシベリア鉄道に乗せられた。帰国の夢も水泡に帰し、三年にわたるソ連抑留が始まった。

季節外れの粉雪が舞うウラル山脈を抜け、貨車の旅三十日目で下車したところは鉱山地区、アルチョモスクであった。ここでは戦車のキャタピラをつくる大規模工場での作業だった。

気温が極端に下がってくる夜間作業に、破壊された溶鉱炉のれんがを運び出す仕事は、不なれと心労とで辛苦の連続であった。

三か月後、我々はさらに西方に移動し、たどり着い